日本農業新聞・野良ばなし　　平成15 年1月16 日

「　常に地震への心構えを　」

1995 年１月 17 日未明､淡路島北部を震源とするマグニチュード７.3 の阪神・淡路大震災が発生した。死者･負傷者 50,224 人、全半壊家屋 249,180 戸という未曾有の大災害になった。

8 年が経過し、記憶と備えが風化しないことを祈る。震源地の真上、兵庫県立淡路農業高校の生徒の貴重な小冊子「震源地の高校生たち」の一部を引用編集し心得としたい。

「17 日朝、5 時 46 分に大地震。真っ暗な部屋の中で物が割れ、ぶつかり合い、次々と落ちてくる音に怖くて怖くて何も出来なかった。『このまま家が壊れて死んでしまうのか』と頭の中が真っ白になった」

「裏手の池が増水し堤防が切れるというニュースが伝わってきた。余震の頻発、決壊の危険が迫る中、不安な２日間を家で過ごした。」

「淡路に台風がきても地震は来ないと確信していただけにショックは大きかった。淡路で揺れがこんなに大きいのだから、東京は壊滅しているのでは」

手記に見る大地震の発生時、最も怖いものは暗い、危ない、正しい情報がないの３点だ。この大地震の対策に、普段から枕元に大型の懐中電灯、携帯ラジオと厚手のスリッパを置いておくことが決め手になる。

家屋が倒壊せずとも食器類や家具のガラスの破片が散乱し、避難時に怪我をし、復旧時に支障を来す。

また自宅付近に溜池や崖がある場合、地震で決壊したり崩れる恐れがあり、その兆候に少しでも早く気づいて避難することが大切だ。

軟弱地盤地域の田畑の農家は、常に地震への対策と心構えが必要。

最後に、根拠のない言い伝えが伏線にあった事を見逃してはならない。

注）被害の数字等は気象庁資料より引用

（　気象情報システム株式会社　高　津　敏　）